

ある社長の死

smallfox

ココロ工業の竹崎社長は、2009年の春先に突然行方不明になり、3日後に発見された。発見されたとき、竹崎社長は、既に司法解剖が終わっていた。

身元不明の遺体として前日にK川の河岸で発見されたとき、誰も、それが従業員500人を束ねる二部上場の光学機器メーカーの60半ばの社長だとは思わなかった。

全身に殴打された痕があり、事件に巻き込まれたことは一目瞭然だった。しかし、後から考えれば、異様だったのは、そういった全身の傷痕ばかりでなく、竹崎社長が3年前に倒産したN建設のボロボロの作業着を身に纏い、一見ホームレス風の格好をしていたことだ。K川の川岸には、JRの鉄橋下を中心に、ホームレスの根城が点在している。その中では、時に諍いが起こるから、当初、警察はホームレス同士の喧嘩の末の犯行と見ていた。あるいは、世間知らずの中学生らによるホームレス狩りか？

その死体が、竹崎社長と結びついたのは、ほんの偶然だった。ココロ工業は、技術屋出身の竹崎社長が一代で築いた中堅企業である。デジタルカメラ、携帯電話等で使われるCCD等を開発してきたが、近年、紙のようにまるめることができるCCDとまるみ補正回路の開発に成功し、将来電子ペーパーが一般的になったとき、それが単なる表示装置でなく、受像装置ともなりうる可能性を提示した。これによって、ココロ工業は脚光を浴び、竹崎社長もビジネス誌等で立志伝中の人物のように取り上げられるようになった。

そして、偶然、K川の河岸から遺体を搬送した隊員が、そういったビジネス誌の一冊を見て、「あっ」と声を上げたのが、搬送の翌日だったのである。こういった偶然がなければ、遺体と竹崎社長は、永遠に結びつかなかったかもしれない。

平成2×年3月12日の竹崎社長の足取りはこうだ。

ココロ工業は、3年前に、従前工場内にあった社長室と総務部の一部の機能を、K市の新幹線停車駅の前に建った高層のオフィスビルの一角に移した。世界不況のあおりを受け、開業後も空室が目立つ高層ビルへの入居を、K市の経済界から強く勧められた竹崎社長が、断り切れなかったためとも言われている。あるいは、10年ほど前から、会社の切り盛りを、米国カリフォルニアの名門私大でMBAを取得した専務の長男に移譲しようとしており、その仕上げとして、自分は、現場から離れたのだ、とも。いずれにせよ、夕刻になるとオレンジ色にきらめく北関東の山々を一望できる広々とした社長室で、竹崎社長は、手持ちぶさたに科学雑誌を読むことが多くなった。しかも、事業に係わりのある応用技術の雑誌は日増しに減り、基礎分野の雑誌が増えていた、と言う者もいた。

このビルから、K市郊外の工場までは自動車で30分。2日に1回は、工場に顔を出さないと気の済まない竹崎社長だったが、周囲の者が、社長自ら頻繁に運転するのは危険だと言い出した。それで、社長は、しづしづ運転手を雇うことになった。しかし、面識のない者は別の意味で心配なので、それまでたまに使っていたハイヤー運転手で、4年ほど前に退職した本村に声がかかったのだ。

「私は、Dタクシーを辞めた後は、市役所のシルバー活動っていうのに登録して、市営プールの駐車場でクルマの誘導の仕事をしていたんです。のんびりした職場で、冬なんて、プールに来る人なんていないから、駐車場の端に丸椅子を出して、そこに腰掛け、何もせずに日を送るってことも多かったんですよ。風が流れると、草木がサワサワ鳴り、静まると、裏の小川の音が聞こえてくる、そんな感じで、結構楽しんでましたね。そしたら、母ちゃんが、ココロ工業から電話があったって言うんで、一体何の用事だろうと思っていたら、それが社長さん本人からの電話だったんです。びっくりしましたよ、そりゃ。ハイヤー時代は、自動車の中で声をかけられることもありましたが、覚えていてくれたとは、思っていませんでしたから。」

本村の言うには、工場を訪れる他、竹崎社長は、取引先やK市の財界人と会合を持つことが多かったようである。そんなときは、大抵、市内のホテルや産業会館に行くように言われ、そこで小一時間待たされ、戻って来た竹崎社長を自宅まで送るという生活だったようだ。ただ、本村の付けていた運転日誌を見ると、本村が社長の戻りを待たないこともあった。「今日は、二次会まで行かないと済まなそうだから、帰りはタクシーを拾うよ。」等と言って、返されることもあった、というのである。

「そうですね。それは大抵なりゆきで、決まっていらないんですが、夏目丘の会合のときは、いつも待ちませんでしたね。『今日は、遅いから。』と言って、帰って構わないと言うんです。」

そして、3月12日の夕方5時ころ、本村が竹崎社長を降ろしたのも、夏目丘だった。

「いつもと変わらない様子でしたよ。『まだ、冷えるね。』と言って、夏目丘の駅前商店街の入り口でクルマを降りたんです。それが、社長さんを見た、最後でした。」

社長が夏目丘に行くのは、ほぼ月に1回の頻度だった。それは、本村が仕事を開始したころには既に確立されていた習慣のようである。竹崎社長は、夏目丘に何の用事があったのだろうか。「会合」というが、あの土地で、どんな「会合」があったというのか。捜査本部は、まず、この点に注目した。なぜなら、竹崎社長の向かう他の目的地は、いわゆる商業地区が多かったが、夏目丘は、いわば住宅地で、ビジネスの会合にはおよそ似つかわしくない土地であったからである。

事件は、意外なところから動いた。

その日、春日巡查長と井岡巡查は、各所から借り出した3月12日の防犯ビデオを調べていた。もしかしたら、竹崎社長が、映っているかもしれないからだ。夏目丘の住宅街にあるコンビニエンスストアの防犯ビデオを見ながら、春日巡查長は言った。

「この辺のこの時間帯は、来るのはガキばかりだな。だめだ、こりゃ。」

「塾でも行くんですかね。子供たち、浮かない顔ばかりですね。」

「んなことは、知ったこっちゃない。とにかく、オタク社長は映っちゃいないな。」

「春日さん、マスコミが聞いたら騒ぎますよ。そんな言い方。事件の被害者なんですから。」

「騒いでくれた方が、目撃者も出るから良いつつうの。」

「また、また。本当に騒いだら、一目散に雲隠れするくせに。あ、こっちは、どうです、別の角度からの同じ時間帯のビデオ。お客が同じだから、意味ないですかね。」

「ばか、全部見なくちゃ、駄目なんだって。俺たちは小智恵を回したら負けなの。考えちゃだめだよ、チミ、そういう難しいことは。」

「でも、無駄ですよ。同じ子供たちばかりなんですから、きっと。」

「ばかは、ばかにしかできないことをしなくちゃ。さあ、始めなさい。」

確かに、ビデオは、先程と同じレジを別の角度から撮影しただけのものだった。しかし、春日巡查長の思ったとおり、そのビデオには、従前映っていない、コンビニエンスストアの外が映っていた。

「ほら、外が見えるだろ。オタク社長が、通り過ぎるかもしれないぞ。目を凝らして見ている。」春先の夕方は、暗くなりかけていたが、コンビニの電灯の為に、近くを歩く者は見えなくはない。しかし、店の前は、郊外ではよくあるように、駐車場になっていたから、そこを歩く者は少なかった。現に、今も一台黒塗りの自動車が駐車した。

しばらくして、井岡巡查が言った。

「さっきの自動車、駐車したのに、お客が誰も店に入って来ませんね。」

「確かに。駐車場代わりってことか。ちょい、怪しいな。」

「ナンバーは見えませんが、高級車ですね、これ。政治家か、社長さんが乗るような。」

そう言って、2人は顔を見合わせた。

その自動車が、本村が運転していたものであることが分かるまでに時間はかからなかった。本村は、その日、帰って構わないと言われても従わず、なお1時間以上、夏目丘にいたのである。